

やるにしないから
セックスでもするか

本編47枚





うわあ……
すごい、きつい……

何か、はいってる……
おなかの中に熱いのが……

ぐちゅ

大丈夫……
いたくない？

んんん!!



夏休み親が仕事の都合で家を空けることになったので、その間、俺は親せきの家に預けられることになった。

親に連れられ電車で揺られる。

乗り換えれば乗り換えるほど人の姿は減っていき、窓の外に移る景色も、大きな建物から雄大な山々へと姿を変えていく。



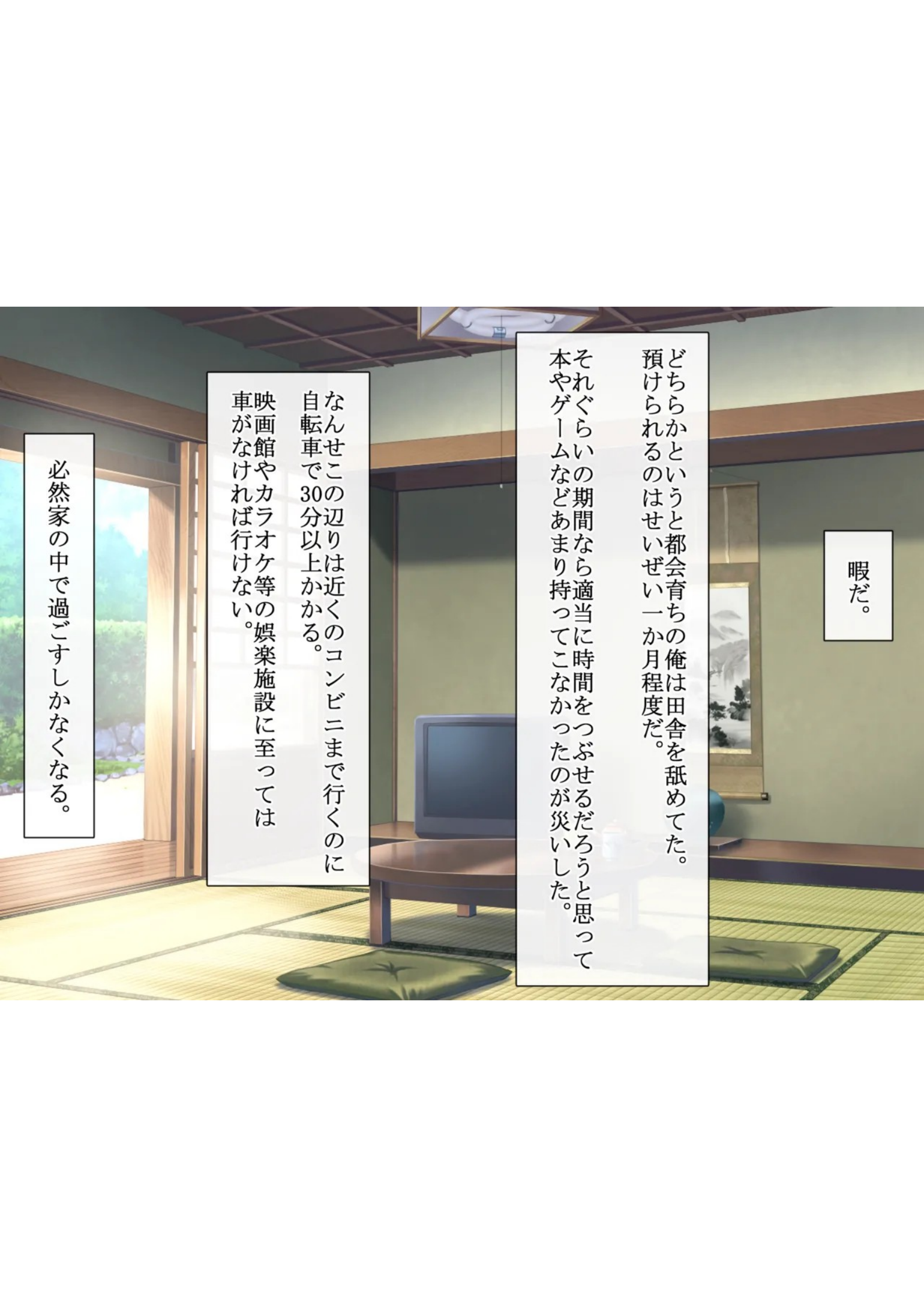
正味4時間の電車移動の後、さらに40分バスを乗り継ぎ、30分歩いた先によりやく目的地が見えてきた。

おお、よく来たね

古く大きな家の前で出迎えてくれたのは
父親の弟である叔父さんと、

久しぶりお兄ちゃん！

1歳年下の従妹の陽菜ちゃんだ。



暇だ。

どちらかというと都会育ちの俺は田舎を舐めてた。
預けられるのはせいぜい一か月程度だ。

それぐらいの期間なら適当に時間をつぶせるだろうと思って
本やゲームなどあまり持ってこなかったのが災いした。

なんせこの辺りは近くのコンビニまで行くのに
自転車で30分以上かかる。

映画館やカラオケ等の娯楽施設に至っては
車がなければ行けない。

必然家の中で過ごすしかなくなる。

唯一の救いは陽菜ちゃんがいてくれることだろうか。

何かやることないかなー

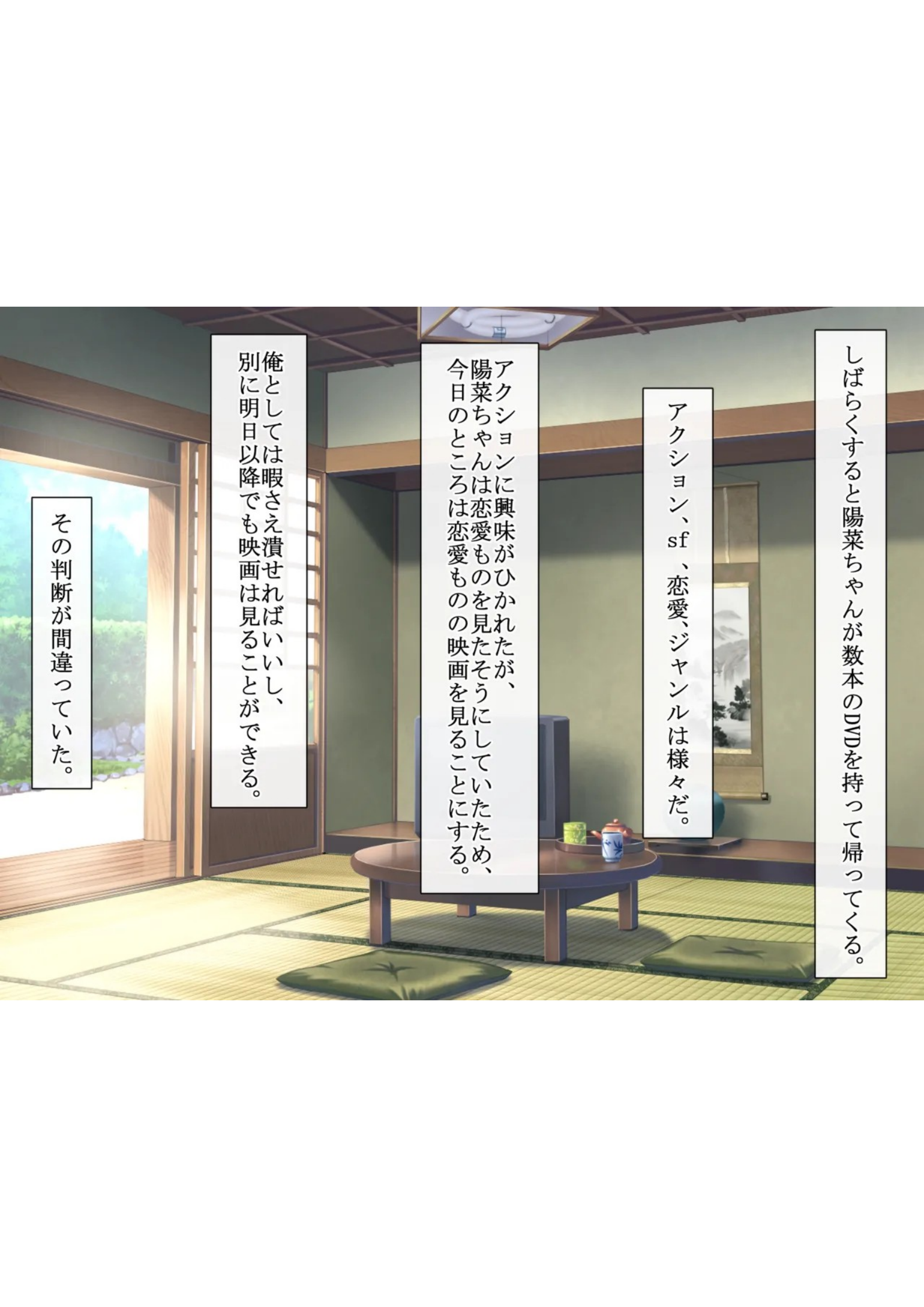
だらだらテレビを回しながら
半分ひとりごとじみた問いをすると、
意外にも答えが返ってきた。

そういえば、お父さんの部屋に
映画が何本かあった気がする

本当！

うん、持ってくるね





しばらくすると陽菜ちゃんが数本のDVDを持って帰ってくる。

アクション、sf、恋愛、ジャンルは様々だ。

アクションに興味がひかれたが、陽菜ちゃんは恋愛ものを見たそうにしていたため、今日のところは恋愛ものの映画を見ることが出来る。

俺としては暇さえ潰せればいいし、別に明日以降でも映画は見る事が出来る。

その判断が間違っていた。

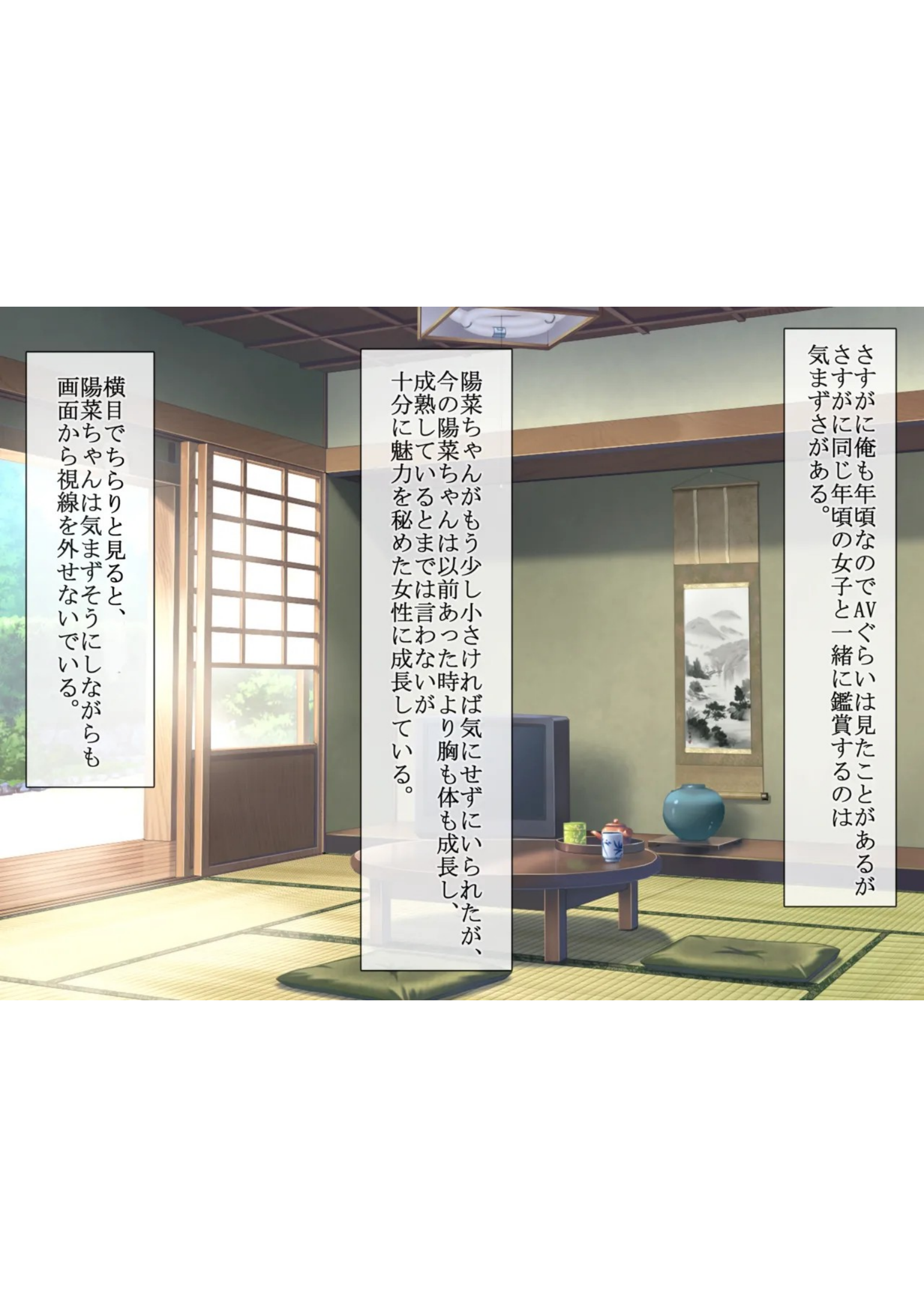


映画が始まって数分、いきなり濡れ場が始まる。
しかもかなり生々しい。

ギリギリを責めるような濃厚なベッドシーン。
女優の喘ぎ声と激しいキスシーンが10分近く続く。

ようやく終わったと思ったらまたすぐ、セックス。

芸術という免罪符を得たポルノ映画なのではないかと思うほどに濡れ場が多い。



さすがに俺も年頃なのでAVぐらいは見たことがあるが
さすがに同じ年頃の女子と一緒に鑑賞するのは
気まずさがある。

陽菜ちゃんがもう少し小さければ気にせずにいられたが、
今の陽菜ちゃんでは以前あった時より胸も体も成長し、
成熟しているとまでは言わないが
十分に魅力を秘めた女性に成長している。

横目でちらりと見ると、
陽菜ちゃんは気まずそうにしながらも
画面から視線を外せないでいる。



意識しているみたいで見るのをやめるとは言いづらい。

つまらないというわけでもないのが
さらに止めるのを躊躇わせる。

結局最後までお互い何も言わず見続けることになった。

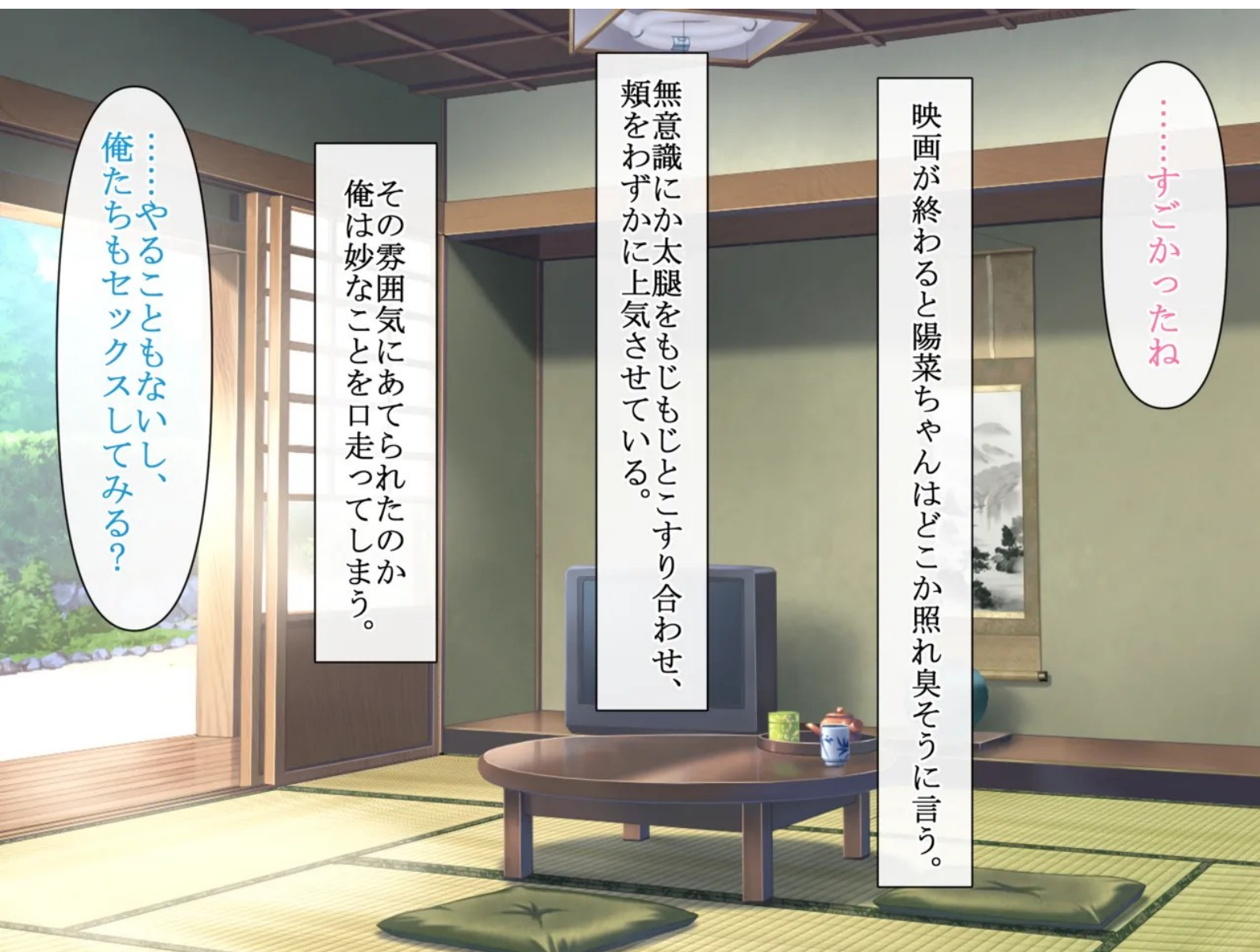
……すごかったね

映画が終わると陽菜ちゃんはどこか照れ臭そうに言う。

無意識にか太腿をもじもじとこすり合わせ、
頬をわずかに上気させている。

その雰囲気にあてられたのか
俺は妙なことを口走ってしまう。

……やることもないし、
俺たちもセックスしてみる？



言ってしまったから
何を言っているんだ俺は、と後悔する。

怒らせてしまっただろうか。
あるいは冗談だと受け取って
笑って流してくれるだろうか。

恐る恐る陽菜ちゃんのほうを見ると
顔を真っ赤に染めた彼女の姿が映る。

そして長い沈黙の後、
彼女は無言でうなずいた。







...うわあ

あ、あんまり見ないで
... 恥ずかしい

すごい、綺麗だよ
... 陽菜ちゃんの身体

ドサ
ドサ

~~~~~





あつ……少し濡れてる

いやっ……  
いやああ

ドサ  
ドサ

ん  
ん

まだ時刻は昼を  
少し過ぎたところ。

一応カーテンは閉めて  
電気は消してあるが、  
窓から差し込む光が  
陽菜ちゃんの綺麗な裸体を照らす。



そ、それじゃ  
...するよ

う、うん

そんな身体を目の前に  
我慢できるはずもない。

俺は焦りながらも  
一物を取り出す。

もんもん

想豆





す、すごい……大きい  
……こ、こんなのが入るの？

うん、多分  
大丈夫だと思うけど

あ、え、と……その……  
私、初めてで……その……

……うん  
……わかってる、うん

お、お、お





うわあ……  
すごい、きつい……

何か、はいってる……  
おなかの中に熱いのが……

ぐちゅ

大丈夫……  
いたくない？

……平気です、ちよつと痛いけど……  
それよりもお股のところが  
変な感じで……

だから……  
もつと動いてえ

すぢゅ  
ア

すぢゅ  
カ

陽菜ちゃんはまるで  
おねだりする様に  
上目づかいに俺のことを  
見つめてくる。

そんな姿を見て  
我慢できるはずもない。







それじゃあ、好きに動くよ

やあ、んううう、  
激しい……だめえ  
太いのが、私のあそこ、  
ぐちゅぐちゅしてる

ごめん、陽菜ちゃん……  
俺もう、止まれそうにない

うそお……なに、だめ……  
こんなの知らない……  
んう、おかしくなっちゃう



若さに身を任せた激しい動き。

しかし陽菜ちゃんの顔には  
徐々に痛み以外の感情が見え始める。

そろそろやばい、出そう

私も何かくる……  
んううう、だめえ……  
いくう……いくう……







はあ、はあ  
……これがセックス

すごかった

んう……こんなの知ったら  
おかしくなっちゃう

小休止の後、  
お互い何も言わず2回戦を始める。

それは彼女の両親が  
帰ってくるまで続いた。





思春期のたかが外れる。  
後は止めるものはない。

お互い好奇心と性欲から日中、  
示し合わせたように部屋に行き何も言わず、  
ひたすらに体を重ねる。

最初のころの羞恥心は鳴りを潜め食欲に性を貪る。

最初は平日、彼女の両親がいない間だけの  
秘かな時間だったが、  
ついにはそれでは我慢できなくなり、







ねえ……  
はやくうう……

陽菜ちゃんは服を脱ぐと  
待ちきれないとばかりにお尻を突き出し、  
おねだりする様に  
可愛いお尻をフリフリさせる。

もう……我慢  
できないよお♡♡



今日も日中セックスにふけていたが、  
仕事が終わったのか、叔母さんが  
思ってたより早く帰ってきたのだ。

そのせいで中途半端なところで中断され  
むらむらとしていたところ、  
一人で慰めようと思っていたら、  
陽菜ちゃんが入ってきて、  
一緒に風呂に入ろうと誘ってきたのだ。

もちろん子供みたいにお風呂で洗いっこがしたいわけではないだろう。

俺は無言でうなずくと、  
両親に黙ってこっそり二人でお風呂に入る。



んうう、あううう……♡  
はいつてえ……きたあ♡

静かにしないと、  
叔母さんに聞こえるよ

アハハ

ん

パール

でもう、だつてえ……  
こんなの、むりいい

お兄ちゃんのおつきいのが……  
私のあそこパンつてえ

ん





リビングにいる叔母さんに気が付かれないかと  
気が気ではないが、それで止まれる理性があるのなら  
そもそも最初から一緒にお風呂に入ったりしない。

数分もすると叔母さんがいるということも忘れ  
お互いに獣のように体を動かす。

おいちちゃんう……  
キスう♡……きすしてえ♡♡

奥をつかれながら、キスをするのが  
最近の陽菜ちゃんのお気に入りだ。

それも口先を合わせるだけの  
幼いキスではない。

お互いの口内を  
舌で貪るような激しいキス。

そしてキスをおねだりするのは  
もうすぐいきそうという  
合図でもある。







んっ……熱いのが、  
子宮の奥ノックしてるう、  
いくっ……ダメ、いっちゃう

俺のほうもそろそろ

アッ アッ

ガッ

お兄ちゃんも……  
いいよ……出して……

私の中に……  
ピュッピュッって  
いっぱい出してえ



お互い絶頂に向けスパートをかけ、  
気持が盛り上がってきているところ  
いきなりお風呂のドアをノックする音が響く。

陽菜、  
まだお風呂入ってるの

お、おかあさんっ！





なっ……な、なにっ！

お風呂長いみたいだから  
どうしたのかと思って

大丈夫、大丈夫だから

……そうなの

ドキ  
ドキ

long





これから買い物に行くんだけど  
何か欲しいものがある。

……平気、  
いってらっしゃい

そうなの……ああ、それと

昂つていたところに水を差され  
陽菜ちゃんは少しだけ不機嫌そうに  
叔母さんを追い払おうとしている。

しかし当の叔母さんは  
そんな娘の機微に  
気が付いた様子もなく、  
話を続ける





へえっ……んんう！

どうかしたの？

ズン

ブル

んっ、ううん  
……な、何でもない

……そう

ら



お、おにいちやんうう……  
ダメえ……だめだつて

ご、ごめん……  
我慢できなくて

んっ

んっ

んっ

んう……だめえ……  
本当にダメなのにい

外に聞こえないよう  
小声で会話をしながら  
俺は腰の動きを再開する。

ん

んっ んっ



抗議の声とは裏腹に  
陽菜ちゃんは逃げようとしな

それどころか陽菜ちゃんのほうも  
俺の体の動きに合わせ、  
快楽を得ようと腰を動かしている。

必死に声を抑えているが  
漏れ出る吐息を  
完全に抑えれてはいない。





陽菜、変な声出てるけど  
本当に大丈夫

だんじょう……ふあ……  
だいたいじょうぶだからああ

返事を返している間も  
腰の動きは止まらない。

むしろそれを  
スパイスにするように  
少しづつ早くなっている。



そういうええ、お兄ちゃんが  
部屋にいなかったけど、  
どこかにいったのかしら

おいっけないいいい、  
いっけないいいいからあ

そうなの……  
じゃあ、倉庫のほうにでも  
いるのかしら

奥にい……  
もっとお、奥の方に

そうなのでもあそこは  
危ないからあまり中に  
入らないよう、言つとかないと

んんうう……  
んんうう、中に……膣にいい  
入ってるうううう







扉が閉まり叔母さんが出ていくと  
同時に絶頂に達する。

激しい絶頂と熱量に  
お互い汗まみれ。

しかし昂った気持ちはい  
まだ静まりきっていない。





お母さんも出かけたし  
もう一回しよ♡♡

そのお誘いを断る理由は  
俺にはなかった。





それからも怠惰な日々は続く。

夏休みの終わりが近づくにつれ、  
その情動は膨れ上がっている。

しかも、今日は彼女の両親が  
出かけて丸一日いない。

絶好のセックス日和だ。



朝ごはんを食べてすぐに  
お互い何も言わずに部屋に集まり服を脱ぐ。

んんっ、ふぁ……  
んっくう、はいつて、きてるう

そしてそのまま体を重ねる。

服を脱いだ時にはすでに  
陽菜ちゃんの膣は濡れており、  
そのまま挿入を繰り返す。

時間も忘れて2回戦、3回戦と繰り返す。





昼食をはさんで  
すぐさま4回戦に突入。

ねえ……陽菜のオマンコの奥……  
お兄ちゃんの大きいので  
ずぼずぼしてください

くしゅん

さすがに3回も出しているせいで  
やや萎え気味だったが、  
陽菜ちゃんはまだまだ物足りないのか、  
挑発するようなおねだりしてくる。





俺がそういうのが好きなのを知ってからか  
最近ではこういうHな言葉で  
誘ってくるが増えた。

どんどん蠱惑的になり、  
Hに積極的になってる陽菜ちゃんに  
狙ってやっているとわかっていても  
興奮を抑えられない。

結局昼を過ぎても盛りのついた  
獣のように体を交わらせ続ける。

さすがに夕方を過ぎたころには  
立たなくなってきたので  
玩具でいじめてやる。

太めのパイプは数日前  
家族で街のほうまで出かけた時、  
陽菜ちゃんがお小遣いで  
こっそり買っていたものだ。

やめえ……  
もうむりいいい……





さすがに半日以上やってるからか、  
陽菜ちゃんのほうもいきすぎて  
もはや呂律が回ってない。

……こわれる、  
オマンコ、  
こわれるからあ

派手に絶頂を迎え  
さすがに小休止を  
とることにする。





夕ご飯を食べた後、再び体を重ねる。

しかし、さすがに疲れたので  
性欲を発散するというよりは  
恋人同士が愛を育むような  
軽いペッティング多め。

二人で一緒にお風呂で  
体を洗い、横になった後、  
全裸で一緒に横になり、  
身体をいじりあいながら  
キスをする。





気が付いたら全裸で体を寄せ合ったまま  
気絶するように眠っていた。

そうして俺の夏休みは終わった。



別れの日。

家族総出で俺のことを駅まで見送りに来てくれた。

帰っちやうの  
おにいちゃん

うん……またね

ううう……  
またすぐ遊びに来てね  
……絶対だよ



薄く涙をこらえながら俺に抱き付いて  
必死に別れを惜しむ陽菜ちゃんは  
年相応に幼く見える。

叔父さんと叔母さんはそんな陽菜ちゃんを  
暖かい目で見つめているがしかし、

……今度会った時にはもっと  
いろいろなことしようね♡

さりげなく胸を押し付けながら、  
俺にだけ聞こえるような甘い声で  
囁く陽菜ちゃんは一か月前とは違う、  
大人の色香を纏っていた。



























